

# 支部だより

2011年中国四国支部大会を終えて

奈良敏文  
松山大学薬学部



質疑応答のようす

## 1. はじめに

中国四国支部は、平成20年(2008年)5月に高知大学で第1回支部大会を開催して以来、徳島年会開催による休止を1年はさみ、昨年は松山大学で第2回を、そして本年は第3回支部大会が広島大学にて楯真一先生(広島大院理)のお世話のもと開催されました。会期は5月14日(土)、15日(日)の2日間、爽やかな青空のもと、緑豊かな東広島キャンパスの学士会館に、総勢61名の参加となりました。

## 2. 第3回中国四国支部大会

ホームページでの案内や講演要旨のとりまとめなど、開催前からスマートさを感じる支部大会です。会場として用意された学士会館2Fのレセプションホールにはグランドピアノも配され、つかの間のリサイタルなどもできそうです。

さて今回の発表は、香川(香川大医, 徳島文理大香川薬), 徳島(徳島大院ヘルスバイオ, 院ソシオテクノサイエンス, 疾患ゲノム研, 院薬, 徳島文理大薬), 愛媛(愛媛大無細胞センター, 院理工, 松山大薬), 山口(山口大農), 広島(広島大院理, QuLiS, 放射光), 岡山(岡山大院自然科学, 川崎医大), そして予想外の京都(京都大生命科学, 院エネルギー)から、合計31演題が集まりました。持ち時間は昨年と同じ12分+3分、日本語での口頭発表です。シミュレーションの発表が幾分増えたように感じましたが、例によって分野は多種多様。3回目の支部大会となりお互いの「顔」も見え出したことも手伝って、専門外の内容でも聴きやすく感じます。今回は香川弘昭先生(岡山大理)を筆頭に、本質に鋭く迫る質問から、知見や考え方を知ろうという質問、また今後の展開への助言

にいたるまで、演者にとっても聞き手にとっても有意義な討論が活発にされました。

そんな中、初参加の沈健仁先生(岡山大院自然科学)は、光合成PSIIの結晶構造(解像度1.9Å, *Nature* 2011年)を報告されました。今や20サブユニットからなる複合体の構造まで解けるのか、単純な化学結合も活性中心では歪んでいるのか等々、興味津々聴きました。

また、津田基之先生(徳島文理大薬)は自身の口演で、特定領域研究の最後であり、科学研究から身を引いて淡路島で陶芸をすると前置きの後、ホヤ視覚サイクルの発表をされました。本当に研究をおやめになるのでしょうか? 来年以降の支部大会にもぜひ参加してほしいと思いました。

その他、加茂直樹先生(松山大薬)の口演に桐野豊先生(徳島文理大香川薬)が突っ込み入れて会場の空気は和らぎ…等々、大先生方が楽しく学問する姿に触れたことは、若手にとっても喜びとなり励みになったことでしょう。

定刻を30分ほど押してプログラムは終了、キャンパス外の料亭にマイクロバスで移動しての懇親会です。津田基之先生が「オーラルで討論できるとてもよい場だ」と仰有れば、支部長の桐野豊先生が「年会とは違った雰囲気にて育てましょう」とお言葉。支部大会始まって以来初の座敷での懇親会は、会員間にほのぼのとした空間を作り上げていました。

2日目も討論は朝から活発に進み、最後に全員参加のもと総会を行いました。会計報告のあと、桐野豊支部長から繰越金を有効に使いたい旨の提案がありました。若手が元気を出して頑張れる材料に使えるとよいので、月並みですが奨励賞などに充てるのも方法でしょうか。また運営委からの話題として、副会長の伊藤悦朗先生(徳島文理大香川薬)から学会誌電子化への動きが紹介されました。紙媒体がなくなることへ不安の声もありましたが、電子化はやむを得ないという

意見が多数でした。Natureなどのサービスにあるように、目次のメール配信を併せてしてもらえると有り難いと思いました。

### 3. おわりに

会期を通じて中堅・若手から多くあがった健全な討論を聞くと、この支部大会がラボのようにまとまる可能性や先々の楽しみを感じ、このまま続いてほしいと思いました。一方、中国四国と一括りにされる支部ですが、よく見れば海をも挟む広範な地域。今回、四国地区からの参加者が減ったことを考えると、開催地の選択は支部大会の活動を左右しかねない重要な問題かも知れないと感じました。来年は、右田たい子先生（山口大農）のお世話で山口開催。多くの皆さんとまた楽しく交流できますことを期待したいです。

最後になりましたが、第3回支部大会をお世話くださいました楯真一先生を中心とした広島大学の先生お



懇親会にて。楯先生（向かって右端）、お世話になりました。

よび学生の皆様、会場も運営も気持ちよく、快適に過ごすことができました。この場を借りて御礼申し上げます。



2日間の支部会を終えて。参加者の集合写真。